第三章　訪問聞き取り調査結果の報告

・聞き取り調査結果の報告

事業所名	グループホーム　A	**母体法人**	特定非営利活動法人(NPO 法人)
事業所概要	平成 16 年開設の２ユニット(18 名定員)のグループホーム(以下ＧＨ)。デイサービスも併設されている。周辺は田畑に囲まれたのどかな環境で、線路を隔てて住宅街がある。		
開催日時	平成 23 年 12 月○日(火)10：30～	**開催場所**	隣接する居宅介護支援事業所会議室
参加者（7 名）	施設長(司会)、スタッフ 2 名、地域包括支援センター職員(行政)、民生委員、家族 2 名		
会議テーマ	今年を振り返って		

会議内容

(1)施設長挨拶、参加者紹介

(2)現状報告（施設側から）

①行事等について（スタッフ）

・インフルエンザの予防接種報告。

・行事（誕生会、クリスマス会）の報告と今後の行事（もちつき大会）の連絡。

②入居者について（スタッフ）

・救急搬送後、入院中の利用者の報告。（Ａ棟）

・入居者の死亡退所（女性)。また、新しい入居者（男性）の報告。（Ｂ棟）

③今年度の振り返り（スタッフ）

・震災について。

・死亡退所１名（Ａ棟)。5・6 月に 2 名の利用者の入退所があり、11 月にも１名が入所（Ｂ棟)。

③職員体制について（施設長）

・今月、職員 2 名退職。パート（月 10 日位。フルタイム１名）を探しており、最近やっと見つかったが、看護師職１名のかわりはまだ見つかっていないとの報告あり。

(3)今年の振り返り（施設長から）

今年１年間の運営推進会議の議題を振り返りながら進めた。

①重要事項説明書のチェック

・「地域密着型」・「地域に根差した」という部分が足りなかったのでは、という反省から項目を増やした。施設理念も「あなたの傍に私がいます」というような、わかりやすい表現に変更した。

②看取りについて

・重要事項説明書に書かれている看取りは重装備であったため変更した。認知症の方の看取りは、苦痛なく自然なかたちを目指している。

・緊急搬送を行った利用者について説明あり。高齢者は急変が多く、自分の症状を訴えることができない認知症の利用者が多い施設にとって、かかりつけ医の協力は不可欠だが、幸い、協力的なかかりつけ医に恵まれている。

③災害備蓄品の確認

・災害時には施設内の備品を食べてもらった。備蓄品の確認をした。

④質疑・意見交換

・災害時の水の確保の話から、水源に関する情報提供（地域の歴史的内容含）が民生委員からあった。

・上記の話から、利用者の水分補給についての質問が家族からあり、利用者の１日の水分摂取量の説

明が施設側からなされた。その流れから、トイレの回数の話にもなり、認知症の症状等により、昼夜逆転の利用者もいるが、個々の利用者に合わせた時間で生活している旨の説明があった。また、昼夜逆転の話からトータルの睡眠時間についての質問があったが、施設側としての一日の睡眠時間の目安について説明があった。

・看取りの話から、他の入居者の死亡について利用者はわかるのかどうか、という質問が家族からあった。施設側から、わかる人とわからない人がいることや、「看取り」の意味について話があった。

・職員の退職の話から、GH の看護師の配置についての質問があった。義務ではないが、通院等あるので看護師がいると他の職員が安心だという説明が施設側からあった。

(4)その他（施設長から）

①医療行為と職員の研修について

・来月（1 月）から医療行為を行うための研修が始まること、その研修内容についての説明があった。

・それに伴い、これからは胃ろうの方も引き受ける事になる説明があった。

・今後の研修予定（1 月ケアマネ研修）と、GH の職員は研修が多い（開設者研修、管理者研修、リーダー研修等）との説明があり、研修中職員の穴をどのように埋めるかが課題との話があった。

②介護報酬について

・来年度からの介護報酬改定についての説明があった。詳細は不明だが要介護度 1～2 の介護報酬が減るらしいとの話。ケアを行う中で要介護度 1～2 の方の見守りや認知症の初期段階が本人の自覚もある時期なので大変なのにという施設側の思いと実際の制度との乖離について話があった。

③緊急時の対応について

・今のところ徘徊で行方不明になる人はいないが、警察や消防に話し、救急車等を呼ぶ時は直接支所に電話をかけることができるようにしたとの説明が施設側からあった。

・上記の説明を受け、地域包括から他の運営推進会議についての情報提供があった。警察に行方不明者の連絡が入ったら、コンビニやお店に FAX や電話をかけるようになっていること、また、利用者の等身大パネルを作成しているところもあり、その際の本人の写真は少し斜めから撮った方が特徴を捉えていて良いとのこと、特徴やいつも呼んでいる名前で呼ぶ事が大事、等の情報提供があった。いずれ職員で探すのではなく早めの連絡と周囲の協力が求められているとの話であった。

・地域包括からの情報提供を受け、施設側から、認知症を隠したがる家族が多く、認知症への理解は不十分であるとの話があった。また、認知症の人はあてもなく歩くので、A 市の人がA市内で見つかるとは限らず、防災無線の限界についても話があった。家族の理解と早めの対応、また近隣市町村への協力も不可欠ではないかとの話があった。

※最後に、次回の運営推進会議の日時を確認して、終了した。

◇参加した感想◇

グループホームとは別棟の会議室で開催された。グループホームと離れた場所で行われることで、集中できる雰囲気がある。

司会進行が巧みであり、話題が逸れそうになっても軌道修正されていた。「地域密着」についても、話し合われており、常に意識されていることが伝わってきた。

事業所名	グループホーム　B	**運営主体**	社会福祉法人
事業所概要	平成 14 年ＮＰＯ法人が開設した１ユニット(9 名定員)のグループホーム（以下ＧＨ)。平成 19 年に社会福祉法人に経営統合。立地はスーパーや保育園、住宅団地に近接する、一般住宅の中にある。今年 3 月に新ユニットが完成し、2 ユニット体制となる。		
開催日時	平成 24 年 1 月××日（月）10：00～	**開催場所**	グループホーム B のリビング
参加者 **（8 名）**	所長（司会)、高齢福祉課職員（行政）1 名、民生委員 2 名、利用者 1 名、利用者家族 2 名（1 名は保育園園長)、職員（介護スタッフ）		
会議テーマ	①　新ユニット開所に向けて　②地域活動について		

会議内容

(1)所長挨拶、参加者紹介

(2)現状報告(所長)

①利用者について

・現在利用者は 10 名。1 名が 1 月から介護度 2 から 3 に変更、更新申請中 1 名との報告。

(3)ユニット開所に向けた報告（所長）

・新ユニット名とそれにこめられた意味について説明があった。また、利用料金や新規利用者の選定（8 名)、実態調査や開所までの流れ（2 月中旬に新利用者の契約、3 月開所式）の説明があった。

・2 月に家族交流会、誕生会を合同で行うことを企画している旨、提案があった（100 歳を迎える 2 月生まれの利用者がいるため)。同日 10:30 から運営推進会議を、翌日に地域住民を対象とした見学会を予定しており、地域住民向けの回覧も準備する予定。

(4)地域活動について

「地域密着型サービス事業所の地域活動等に関する調査」をもとに、施設と地域住民との交流に関する内容について、参加者から評価や意見を伺った。

①保育園園長から

・日頃子どもたちがお邪魔したり、行事の時来てもらったりしているとの話題提供があった。

・震災当時、同じ市内でも水が出るところと出ないところがあり、この施設から水をもらって助かったこと、施設同士で協力があったのはありがたかった旨、話があった。

・震度～以上だったらかけつけるなどの基準を設定してはどうかとの意見有り。預けたままではなく家族に来てもらいたいというアピールが普段から必要ではないか。また、今回の震災を機に施設の備品のチェックは必要という意見もあった。保育園で準備していてよかった物についての紹介もあった。

②家族から

・施設には電話確認だけで、自分のことを優先にしてしまい、「かけつける」ことをしなかった自身の行動を反省したとのこと。

・たくさんある行事について、家族はもっと参加した方が良いとの意見が出された。

③民生委員から

・3.11 の震災時は、自分の地区担当の方に真っ先に行って対応した旨話があった。スーパーの個数制限があった食料品を、一人暮らしの高齢者に配れるよう店側に説明し、食料品を集めたとのこと。また、同じような災害がないとも限らないので、近場に集会所が欲しいとの意見があった。

④高齢福祉課職員から

・行政としては、在宅酸素から支援が必要な人等、即、命に関わるような緊急性の高い人への対応、また全体状況の把握をしながら物資の配布など方針を決めていくため、どうしても対応が遅くなる旨説明があった。行政が機能するまでの急場はしのげるような準備を普段からしておいて欲しいとの要望があった。

⑤利用者から※震災後、被災地から緊急利用中

・ここに入って気持ちが落ち着いた、など、施設に対する感謝の気持ちが述べられた。

⑥所長から

・参加者からの要望を受け、もっと行事に取り組んでいきたいとの話があった。車があるから、未だに近隣からデイサービスだと思われていることも、施設のことを理解されていない人が多い証拠であり、回覧を活用して行事案内をするなどして施設や事業の理解を促していきたいとのこと。また、月１回でも認知症の相談窓口をやりたいと考えており、そのため指導者研修を受けていることも話があった。

⑦その他（意見交換）

・家族から、緊急時、男手が足りないのではという指摘があった。（避難訓練を見学した時に感じたこととのこと。）例えば近隣の男性に「かけつける」という自覚や、この施設の災害支援員は誰、と決まっていれば、震災時もかけつけるのではないかと、市への要望も含め、提案があった。

・施設備品に関連して、民生委員から、自家発電はどうなっているだろうかという質問あり、所長からここでは考えていないがストーブ等の備品を揃えたりはしているとの回答。また、市の方で準備はあるか質問あり、市では準備はしていないが補助制度があるとの回答があった。

⑸まとめ（所長）

・所長から今回の意見を参考に、見直しをしながら出来る事をしていきたい旨話があった。

※次回日程等を確認し、今年の施設や事業についての理解と協力をお願いし、終了した。

◇参加した感想◇

グループホーム内のリビングの一角で行われる形に最初驚いたが、暖かい雰囲気の中で行われる点や、利用者の様子が眼に入る点、利用者も職員も会議の様子を聴くことができる点から良いことだと思った。参加者に利用者がいる点も、利用者の意向の重視がうかがえた。また近隣の保育園園長（利用者家族でもある）の参加により、地域にある社会資源の連携が図られていて、地域密着の志向が現われていると感じられた。集会所の機能も担っていけることは、地域密着型サービスのひとつの理想だろう。

事業所名	グループホーム　C	**運営主体**	株式会社
施設概要	平成 14 年開設の 2 ユニット（定員 18 名）のＧＨ。株式会社が運営する事業所である。田畑や家々が点在するのどかな田園地帯の中に立地している。		
開催日時	平成 24 年 1 月〇日（土）18 時～	**開催場所**	ホテル A ※年明け初回の会議で、新年会を行う予定でこの日はホテル会場での会議となった。
参加者 **（12 名）**	運営推進会議会長、介護保険課職員（行政）、介護相談員 2 名、ボランティア、訪問看護師、家族会会長・副会長、スタッフ 4 名（施設長が議事進行、2 人が書記）		

会議の内容

(1)施設長挨拶、運営推進委員長挨拶、出席委員紹介

(2)11 月、12 月の入居状況報告及び活動報告（施設側から）

①入居状況報告（スタッフ）

・A 棟、B 棟の入所者の入退所の動き、平均介護度、平均年齢、利用者の状況について報告。

・A 棟の新入所者の身体的状況と認知症の状態の説明をし、B 棟では 1 月に骨折で入院した方がいたのでその経緯などの説明があった。

・インフルエンザ等の感染はない。11 月・12 月の通院回数、食事についての報告。

②活動状況報告（スタッフ・施設長）

・毎月発行している施設の便りにそって活動報告がされる。活動や施設の行事、利用者の身体状況について、日頃の利用者の様子について報告があった。

・さらに、スライドで写真を用いながら、行事の様子についてより丁寧な報告があった。

③質疑応答

・介護保険課職員から、施設で感染がでたときどうするのかと質問があった。施設長から、ノロや疥癬については勉強会を開催していること、3 年前、疥癬が発生した際に、出元がわからず、考えられるのは、通院した時に乗った病院の車イスだったので、それ以降、病院に行く時は車イスを持参しているとの説明があった。また、ノロウィルスのときは、部屋でできるだけ過ごしてもらうが、認知症のため難しいこともあり、ある程度他の入居者と離し、職員が車にのせてドライブしたり、ノロ用の消毒液も使用して気を付けているとの説明があった。

(3)参加者から（意見交換）

①介護保険課職員から

・来年 4 月から介護保険の第 5 期計画が始まる。サービス利用の伸び、人口に合わせて作成した。公民館で説明を行っているが、参加者は 5~10 名で、人が集まらないとの話があった。

・4 期の計画を作る段階で、給付が伸び、保険料率を上げなければいけなかったが、準備基金として貯めていたものを使い、上げなかった。しかし 5 期、残っている準備基金の全額投資、資金を集めても上げざるをえず、65 歳以上の負担が増えるとの説明があった。5000 円を超えない程度の保険料にと考えているが、県平均では、5000 円を超える試算であるとの説明であった。

・施設長より、A 町の高齢化率について質問があった。23 年度は 24.3%。25%までいっていない。

32 年度には 30%を超えるとの町の説明であった。

②介護相談員から

・正月に提供した餅について話があった。のどに詰まらせる恐れがあり、他の施設では提供しないところもあるが、正月ということもあって提供すると高齢者は喜ぶ。施設側からは一人ひとりに合わせちぎって出すなどして、大きさにも配慮しながら出しているとの説明があった。

・震災時の状況について質問があり、施設長から説明があった。3 日間停電し、暖をとるのに大変だったこと、床暖だったので、一日目の夜は、みんなで集まって寝たこと、朝にはもう寒く、役場や職員の家から暖房器具を借りて持ち寄ったとの報告があった。材料が手に入りにくかったが、調理はガスだったのでなんとか食事を提供できたことや。水は出たので、トイレは困らなかったとの報告もあった。

③訪問看護師から

・感染症がなかったことや、職員の介護の意欲に感心している旨、話があった。また、この施設の家庭的な雰囲気のよさについても誉めていた。また、認知症の場合、痛いという感覚に気づけないこともあるため、入居者の苦痛を少なくし、ひどくなる前、早いうちに病院へ行くよう助言があった。

④ボランティアから

・スタッフの日常の努力や細やかな気持ちに感心していることや、自身もこの施設に入りたいと話している。

⑤家族会会長から

・集まりが少ない、年に 1 回くらいは集まりたいと思っているが、仕事があって来れなかったりするとの話があった。

・便りだけでなく直接話を聞いてわかることもあり、今回、様々工夫している様子がわかった。（利用者の）楽しみといったら、食べることだったり、歌ったり、踊ったりだと思う。もっと施設野の周辺の人の状況、地域の人にも理解してもらうことが大切なのではないかという意見があった。それに対し、施設長から、前回の運営推進会議で、地域の人に対して毎月便りを送るという意見もあったが、まずは 3 ヶ月に 1 回程度、事前のお知らせ（行事）などについて伝えるとの説明があった。なお、写真は個人情報もあるので、個人が特定されないよう配慮する説明もあった。また、施設長の説明から、訪看からの情報提供で、毎月 22 日に公民館で集まりがあるので、その場で渡せばいいのではという提案があった。

※この後懇親会へと流れ、会議は一旦終了した。

◇参加した感想◇

施設長が議事進行しているところが多い中、運営推進委員長を別途任命し、議長として議事を進行されている点に新鮮さを感じた。また、パワーポイントを利用し、写真を通じて、利用者の様子を説明されているのは、わかりやすかった。家族会が結成されていて、家族会の会長、副会長という立場で参加されているところも特徴であるし、地域の訪問看護師や介護相談員、ボランティアの参加も特徴的であった。それぞれの方が意見や考えを述べられ、活発なやりとりがなされていた。

※会議参加２回目

事業所名	グループホーム　B	**運営主体**	社会福祉法人
開催日時	平成 24 年 2 月××日（土）10：30～	**開催場所**	グループホーム B のリビング
参加者 **（14 名）**	所長、高齢福祉課職員(行政)2 名、民生委員 2 名、利用者家族 6 名、スタッフ 3 名		
会議テーマ	①運営推進会議とは　②来年度の予定など		

会議内容

(1)所長挨拶、参加者自己紹介

(2)運営推進会議とは（所長）

※家族会（介護報酬改定の説明会）と誕生会行事と同日に行われ、普段より会議参加者が多く、初めての参加者もいたため、運営推進会議自体についての説明があった。

・2 ヶ月に 1 回、奇数月に、グループホームが閉鎖的にならないように、地域の人に知ってもらえるようにという目的で行っているとの説明があった。また、家族に向けての意見交換の場として位置づけているとの説明があった。

(3) 現状報告(所長)

①利用者の要介護度の報告があった。

(4)来年度の予定について（所長）

・運営推進会議の時に、30 分程度「ミニ講座」を再開しようと考えているとの説明があった。内容は認知症の理解や救命講習、小学校や中学校との交流など。地域の人に回覧して参加者を募っていくとのことである。

・小学校の通学路という事もあってトイレを借りにくる子がいるとのこと。これからさらに気軽に立ち寄れるような交流などを考えたいとの話があった。なお、新ユニットには玄関に AED があり、地域の人など不特定多数の人に使ってもらうことを目指しているとのことだった。

※この後、会議は終了し、誕生会行事へと移った。

◇参加した感想◇

運営推進会議の前に介護報酬改定の説明会が開かれ、終了後には 100 歳の利用者の誕生会が開催された。行事を効率的に開催し、家族や地域の方々が参加しやすいよう、そしてグループホームを知ってもらおうという努力が強く伝わってきた。

※会議参加２回目

事業所名	グループホーム　A	母体法人	特定非営利活動法人(NPO 法人)
開催日時	平成 23 年 12 月○日　10：30～	開催場所	隣接する居宅介護支援事業所会議室
参加者（7 名）	施設長、スタッフ３名、地域包括支援センター職員（行政）１名、利用者家族　２名 民生委員１名、議員１名		
会議テーマ	①今年度を振り返って、②来年度何を求めるか、③その他		

会議内容

(1)施設長挨拶

人事異動の報告があった。

(2)現状報告（施設側から）

(3)今年度の振り返り（施設長から）

・震災があったが一致団結して乗り越えた。これもみなさんの力があったからこそ、と施設長から皆さんに感謝の気持ちが述べられた。

・春夏秋冬通してお出かけや誕生日会、民謡会など日常的な楽しみはあり、今年度は一番館祭りができなかったので、その事などを踏まえて来年度何を求めるかを考えたい。

(4)来年度何を求めるか（意見交換）

・行事について、家族から、月報で様子を知ることができるが、現状や利用者の反応がわかりづらいことや、祭りなど、「誰のため」の行事なのかがわからないとの意見が合あった。施設長から、行事は利用者に楽しんでもらうことや家族との交流がメインであると考えていたが、「誰のため」ということを特に意識してこなかったように思うという話があった。また、行事に取り入れた方が良いものなどはあるか、参加者に意見を募ったところ、家族から、行事のときの利用者の表情が分かると良いことや、家族が参加しても良いようなものがあれば教えて欲しいとの要望が出された。施設からは、毎月月末にどういう行事をしたという結果のみ報告していたが、来月の行事の案内を掲載して家族に積極的に案内することも検討する回答があった。なお、施設では祭りを見にいったり、もみじ狩りをしたり、季節の行事は随時やっている。季節感は感じてもらうようにしているとのこと。ただ、個人情報で写真を使うことができない利用者もいるため、様子を伝えるのが難しい場合もあるとの回答もあった。

・また、行事にかかるスタッフの負担を心配する発言もあり、ボランティアや家族の協力を得て行うのが良いのではないかという意見が出された。施設側からは、ボランティアや家族の協力が大切だと感じる一方、家族会を作ってこなかったため、家族の状況を心配しているという話があった。家族の中にはオープンでない（認知症のことや施設に入っていることを隠したい）人もいるとのことだった。

・行事にからめて、感染症やインフルエンザについての質問が民生委員から出された。施設側から、インフルエンザになった時の対応の説明（薬を飲み、部屋で過ごす）や、職員から感染するリスクが高いのでマスクをするなどの対策をしているとの説明もあった。

・また、地域を意識した活動として、2 ヶ所ある公民館で花植えやプランターを置くことはできな

いかという施設側の考えが報告された。地域包括の職員からも、花植えなどをして地域の人に見かけてもらうことで、相談などをしやすいよう工夫ができるのではないか、新しいものをやる以外にも今までの活動の工夫ができるのではないかという意見もあった。

(5)認知症について（施設長から）

・以前は地域の人を呼んでお料理教室や家族に対する認知症の説明会を開いていたが、当時から随分解明されてきたこともあるので、家族にもう一度認知症について、知ってもらいたいと思っているとの話が、施設長からあった。また、参加者から、薬についての質問があり、認知症の薬（抗認知症薬やアリセプト）についての説明もされた。なお、今まで 4 人の人が退所したが中には就職した人や鬱の症状があった人が回復して退所した人、症状が進み重度になって退所した人もいるとのこと。参加者からは、そのような事例や、「グループホームはこういう所だ」という事を家族や地域の在宅で苦しんでいる人たちに向けて、もっと知ってもらうのがいいのではないかという意見が出された。

・認知症や施設を理解してもらう方法について、参加者から意見を募った。施設としては、以前介護相談の電話を担当していたが電話があまりなかった経験から、公民館の活動で認知症の説明会を開けないかなど社会福祉協議会に働きかけているとのことだった。地域包括の職員からは、サロンで話をするという方法もあるのではという意見も出された。また、地域に文書の配布は難しいが、行事の参加を回覧で案内していくのもいいのではないかという意見も出された。

(6)介護報酬改定について（施設長から）

・介護報酬改定があり、2 ユニットという事で報酬が下がるとの話で、運営が大変だとの説明があった。

(7)その他

・隣の市で、消防署に要支援者登録名簿のようなものがあり登録しておくと災害時に食事をもらえると聞き、市町村に問い合わせてみるとの話があった。

※最後に、次回の運営推進会議の日時を確認して、終了した。

◇参加した感想◇

非常に活発に議論が行われ、密度の濃い運営推進会議であった。地域住民の発言が多く、グループホームや地域のことを考えている住民が参加して下さっている表れだと感じた。電話相談に電話があまりかかってこなかったという点も含めて、認知症の理解を地域で進めていく役割をグループホームが担っていることの意味を考えさせられた。

※会議参加２回目

事業所名	グループホーム　C	**運営主体**	株式会社
開催日時	平成 24 年 3 月〇日（木）13:30ー	**開催場所**	グループホーム向かいにある公民館
参加者 **（11 名）**	運営推進委員長、施設長、介護保険課職員（行政）、民生委員、ボランティア、利用者家族２名、利用者２名、スタッフ２名		

会議内容

(1)開会挨拶（事務局から）、会長挨拶（運営推進委員長より）、出席委員の紹介

(2)入居状況報告及び活動報告

①入居状況報告

・グループホーム A 棟、B 棟の入居者の入退居の動向、平均介護度、平均年齢、イベント報告、利用者の状況等について報告された。なお、A 棟の平均年齢は 82.3 歳、平均介護度は 4.1、B 棟の平均年齢は 82.4 歳、平均介護度は 3.4 で、平均介護度は全国的なグループホーム入居者の平均介護度 2.5 に対し、どちらも高い数値となっている旨報告があった。入居者の体調については、風邪症状が出て通院する方は数名いたが、インフルエンザに感染した方はいなかったとのことだった。

②活動報告

・新年には、正月の雰囲気を味わっていただこうとイクラご飯やお雑煮を食していただいた。そのほかにもみずき団子作りや節分の豆まきなどのイベントを行い、皆楽しそうに参加した旨報告があった。

(3)参加者から（意見交換）

①介護保険課職員から

・介護保険制度改正に伴い、紫波町の保険料の見直しを行う。介護報酬の影響率は 0.7%に設定されている。詳細は後ほど。

②民生児童委員から

・現在担当地域には独居高齢者が５名ほどいるが、地域の人たちの協力で民生委員の仕事も助かっているとの話があった。地域には寝たきりの人は 2 人、また、1 人暮らしの人で、凍った状態で発見された人がいた。実際は１人暮らしでも住民票により、そうと見なされない人もおり、対応が必要だとの話があった。これについては、介護保険課の職員からも同様の話があり、団塊の世代が後期高齢者になる時代に向けて在宅介護へのシフトが国の政策として行われているが、現実的になかなか難しい状況だとの話があった。それに対し、施設長から、手続きが必要であるものの、3 人までデイサービスが可能なので、そういう利用の仕方をしてもらって、見守りの一部になればいいと思っている旨、話があった。介護保険課職員からも、「迷惑をかけたくない」思いがあり、その人がどこまで求めているのかにもよるが、なかなか入っていくのが難しいとの話があった。施設長からは、他のグループホームと支援ネットワークを去年立ち上げたとの説明があった。

③ボランティアから

・グループホーム入居者が地域イベントに参加したとき、利用者の楽しそうな姿に、地域の人に「入ればあんなに明るくなれるの？」と聞かれたとの話題提供があった。地域住民のなかには独居ではなくても日中１人になってしまう人もおり、週１、２回でも利用できるサービスがあればいいと思っていること、また、地域に対するその情報提供等も必要との話があった。それに対し、施設長から先ほどのデイの利用や、空いている部屋があればショートステイも利用可能との説明があった。ボランティアからは、高齢者の集まりのときに、そういう情報を流していきたいとの話があった。

④利用者家族から

・夜間を想定した避難訓練について、夜間の職員体制は今のままで大丈夫なのか質問があった。それに対し、施設長から、スプリンクラーを設置したこと、繰り返し避難訓練していると、利用者も慣れてくるとの説明があった。今、全体でやると避難に６分ぐらいで、年に２回と言わず、何回かやって緊急時に備えたいと話していた。

⑤利用者から

・要望として、おいしいものが何回もあれば、ありがたいとの話があった。

(4)介護保険報酬改定について（施設長から）

・認知症対応型共同生活介護については現行の要介護度別の基本報酬体系を見直すとともに、ユニット別の報酬設定による適正化を図るとの説明あった。

・訪問介護の報酬も改定され、現在訪問介護がグループホームから手を引き始めているとの情報が入った。老人ホームと訪問介護が一体化しているところは減点対象となるため、訪問看護から、「グループホームにはもう訪問しない」と申し出を受けたグループホームがあるとのことで、これから、地区の実態を調べていくが、引き続き、訪問看護には訪問してもらいたいとの話があった。

・看取りの対応強化ということだが算定要件の達成が難しいとの説明があった。医師が認めないともらえないこと、家族の同意書類等も必要になり、看護師も不足すれば看取りが行えないなどの問題点があるとの説明であった。

・最後に、まだ正確に改定内容について理解できているわけではないが、様々な問題を感じ、これからの社会保障の行く末が不安との話があった。

◇参加した感想◇

議題や介護報酬改定を通じ、施設長のポリシーが伝わってきた。施設長がポリシーを持ち、それを地域や行政の人に伝えていく役割が運営推進会議にはあることが理解できた。会議の後、お茶とお菓子が出され、出席委員をもてなす心を感じた。

事業所名	グループホーム　D	**母体法人**	社会福祉法人
事業所概要	平成 16 年開設の 1 ユニット(9 名定員)のグループホーム（以下 GH)。国道沿いに住宅が点在する集落の高台に位置し、同じ敷地内に特養が併設されている。		
開催日時	平成 24 年 3 月×日（金）13：30～	**開催場所**	隣接する特別養護老人ホーム 会議室
参加者 **（8 名）**	施設長（司会)、職員 2 名（介護主任、介護職員)、利用者家族、福祉課職員、運営委員、第三者委員、元小学校教諭		

会議内容

(1)現状報告（介護主任から）

・利用者の平均年齢、要介護度についての報告があった。（平均年齢は 87 歳。平均要介護度は 2 で要介護度 1 が 1 名、要介護度 2 が 7 名。）

(2)行事報告、行事予定（介護主任から）

・12 月～3 月に行われた行事の内容と参加人数について配布資料に沿って説明された。

・3 月にはお茶会、4 月には花見と食事外出、5 月には小・中学校運動会見学、食事外出の予定。

(3)各委員会の報告（介護主任から）

・環境整備委員会と防災委員会の活動報告があった。

(4)参加者から（意見交換）

①施設長から

・東日本大震災をふまえ、この施設の裏山の山崩れの可能性についてボーリング調査をして地質を調べた旨、報告があった。

・緊急時の対応、特に夜間に不安がある。地域全体として防災システムはあるが地区毎に協力体制が違う所もあり、協力について検討が必要な旨、話があった。

②行政から

・小規模の福祉施設には 4 月 1 日から消防法の改正で指導が入ること、スプリンクラーの設置や防火管理者、地域との連携などが強化されることの説明があった。

・第 5 期介護保険事業計画についての説明があった。介護保険料もアップする見通しとのこと。

③家族から

・ＧＨでは家にいる時よりも本人が元気そうで、認知症の進み具合が遅くなったのではないかとの話があった。一方で、歯磨き後のチェックはどうなっているか、かぜの予防として、口腔ケアが重要といわれているので、歯磨きしている状況を確認しているのかの質問があった。介護職員からは、一緒に歯磨きして、歯磨きの状況を確認しているとの説明があった。

・栄養士がいるのか、食事のメニューは隣接している特別養護老人ホームと一緒なのか質問があった。それに対し、施設長から、栄養士は施設本体にいて、ＧＨにはいないこと、朝と夕はＧＨで作った料理を食べていただき、昼は特別養護老人ホームに移動して食べてもらっているとの説明があった。また、それによりデイサービスに来ている地域の人と交流できる利点があると説明があった。

・家族から、どんなものを食べているのか知りたいので、可能であれば献立表が欲しいとの要望が

あった。また、季節感を感じる事が出来るようなメニューなどＧＨだから出来る工夫をしてみてはどうかとの提案もあった。

④元小学校教諭から

・ニュースでは最近孤立死をよく観るが心配していること、地域の事は１人や２人ではどうにもならず協力が必要。人事ではないと思い地域の人と関わっているとの話があった。また、被災地からの避難者への対応を含め、寄り添うという事が大切だと話される。それに対し、行政から、国では孤独死を孤立死と呼んでいること、また、盛岡には「これからの暮らし相談室」があり、サブセンター開設に向けて動いているとの情報提供があった。

(5)介護報酬改定について(施設長から)

・要支援２、要介護度１、要介護度２は改正後利用料金が低くなるとの説明があった。（重要事項説明書変更同意書に沿いながら、介護報酬について説明）ただ、料金は他の施設と比較しても安く、光熱費がかさんでいるので困っているとの話があった。家族からは、水道光熱費など住まいに関する料金が高くなるのはやむを得ないと思うとの話があった。

(6)その他、介護主任からリスクマネジメントについて

ヒヤリハット報告書、転倒・アクシデントレポート

・４ つのケースが紹介され結果としてどのような対応がとられたのか説明された。対応策としては環境整備や目配り気配りが挙げられた。歩行状態が不安定な利用者の付き添いをする場合、職員は荷物を持たないようにするなど具体的な取り組みが説明された。

(7)外部評価目標の経過について

・３つの問題点に対する目標や具体的な取り組みについて説明がなされた。

◇参加した感想◇

地域の多様な方が参加している印象。参加者も多い。特別養護老人ホームに隣接しているため、グループホームだけが地域密着型というより、特別養護老人ホームも一体となって、地域密着型であるように感じられた。地域の高齢化を地域住民が深刻に考えていることが伝わってきて、地域の高齢化を支える場所として地域住民から頼りにされていることがうかがえた。

事業所名	グループホーム　E	**母体法人**	社会福祉法人
事業所概要	平成 21 年開設の 1 ユニット(9 名定員)のグループホーム（以下ＧＨ)。小規模多機能型居宅介護事業所も併設されている。大船渡湾をのぞむ高台の一番上に位置し、周辺は住宅街である。震災時には大きな被害を受けた地区にある施設だが、この施設は高台にあったため津波被害を逃れ、地域住民の避難所および災害復旧拠点として機能した。震災以前から民生委員含めた地域住民による GH の支援組織も存在し、地域との結びつきが強い施設である。		
開催日時	平成 24 年 3 月〇日（〇）10 時～	**開催場所**	グループホーム居間・食堂
参加者 **（45 名位）**	グループホーム・小規模多機能ホーム利用者全員、利用者家族 4 名、法人理事 1 名、町内会会長、公民館長、行政連絡員 2 名、民生委員 4 名、婦人部 3 名、地域住民 10 名、ボランティア 2 名、スタッフ全員		

会議内容

※行事も含めた 3 部構成となっている

第 1 部　ぼた餅作り

・利用者、地域住民、婦人部が一緒になってぼた餅作りをおこなった。（お彼岸時期であったため）

第 2 部　寄り合い

(1)開会、婦人部長から挨拶、参加者紹介

(2)経過・活動状況についての報告

①1 月～3 月の経過報告（職員）

・資料に添って説明が行われた。

②利用状況報告・職員研修報告（職員）

・資料に沿って説明が行われた。

③外部評価結果報告（施設長）

・今年度 11 月に行われた外部評価の結果について資料に添って説明が行われた。

(3)スライドショー

・プロジェクターを使って、スクリーンにスライドを写し出して、みんなで同じ写真を見ながら、この 1 年に行われた運営推進会議を含め 1 年を振り返った。

(4)ワークショップ

・来年度の年間計画を参加者全員で作成。ひとりひとりが付箋に来年度行いたいことを書き、発表し合い、発表した付箋をホワイトボードに貼っていった。利用者からも「特上寿司が食べたい」「手芸がしたい」「温泉に行きたい」といった提案が出された。

第３部　会食

皆で作ったぼた餅が入ったお弁当を皆で食した。

◇参加した感想◇

グループホームと小規模多機能ホームの利用者全員参加で、職員も入れると 40 名以上の参加という形態に何より驚いた。賑やかで、熱気もあって、「会議」という雰囲気ではなく、「集まり」という感じがした。地域住民の参加も多く、日ごろから地域住民と密な関係を築いていることがうかがえた。運営推進会議そのものは、配布資料及びスライドショーの写真から避難訓練や団子作りといった行事と組み合わせて行うことも多いようである。

事業所名	グループホーム　F	**母体法人**	社会福祉法人
事業所概要	平成 23 年開設の 1 ユニット(9 名定員)のグループホーム（以下ＧＨ)。平成 20 年に開設した小規模多機能型居宅介護事業所に併設。川沿いの道路に沿った住宅街に立地しており、震災時は川に沿って津波がおしよせ、大きな被害を受けた周辺地域だが、この施設に被害はなく、震災後は避難所となって多くの地域の人を受け入れた。		
開催日時	平成 24 年 3 月○日（○）10:00~	**開催場所**	小規模多機能ホーム会議室 (GH とも繋がっている)
参加者 **（14 名）**	小規模多機能ホーム長、ＧＨ所長、法人総所長、公民館長、保健介護センター所長（行政)、地主、老人クラブ会長、民生児童委員 2 名、主任児童委員、利用者家族、スタッフ 3 名		

会議内容

(1)ホーム長挨拶、運営推進委員紹介、法人所長より挨拶

(2)協議事項

①経過報告

・1 月から 3 月までの職員研修を含めた経過報告が行われた。

②利用状況報告

・小規模多機能からは、民生委員から利用者を紹介してもらい、仮設とのつながりがもてたこと、(震災の影響で)訪問のニーズは 6 月まで殆どなかったが、4～7 月は仮設に入るまでの宿泊メインでの運営で、8 月から本来の小規模の機能、通いを中心に行えたとの報告があった。今後もその人の生活にあったサービス提供をしていきたいとの話があった。一方、ＧＨからは、震災時は開所前で、建物はすぐに避難所になったこと、それでも 4/1 に開所し、定員 9 名を受け入れたこと、当時は全員被災者だったが、現在被災者は 6 名であることが報告された。利用者の不安はスタッフのケアにより落ち着いた状況になってきているとの報告があった。

・利用者の平均介護度の報告と通院状況の報告があった。

・この地区の利用者の割合が報告された。（ＧＨが 9 割、小規模多機能では 25 名のうち 20 名がこの地区の住民で、全体として 8 割が地区の人。）

③事故、ヒヤリ、苦情統計報告

・小規模多機能の、ヒヤリの詳細について、参加者から質問があり、生ごみを食べようとした利用者がいたこと、利用者が 1 人で外に出て、段差があり危なかったこと等の説明があった。その後すぐにミーティングを行い、ケアに活かしているとのことだった。ＧＨからは、骨折した利用者についての経緯と現在の状況について説明があった。

④年間活動報告

・ＧＨの計画については震災前にある程度立てていたため、予定通りの開所ができたとのこと。

・毎年地域の小中学校のボランティアの受け入れをしていたができなかった。中学生に敬老会に参加してもらった際、震災で親を亡くした子どもがよさこいを踊ってくれたことや校長先生の言葉に感激したとの話があった。(震災で)地域がより密着したのを実感したと施設長が語った。

・7 月頃より仮設住宅の訪問が多く、朝の訪問をしたら倒れていた、ということが 2 件ほどあった。緊急事態の発見ができたとの報告があった。

⑤第 5 期介護保険事業の概要説明（保健センター所長から）

・資料にそって説明があった後、質問や意見交換がなされた。甚大な被害を受けた地域について、利用料の減免措置など、特区を活用できないかという質問や、仮設の虐待の状況や支援体制についての質問や意見もあった。また、民生委員から、個人情報の関係で、1 人暮らし高齢者や障害者等、地域の状況がわからない等の意見も出された。それに対し、防災計画等の命にかかわる内容については、地域や家族が認めるならば、積極的に（個人情報を）開示していくべきとの意見が出された。また、施設側から、仮設入居者で気になることがあれば、事業所や地域包括に連絡してほしい、情報共有していきたいと、施設側から参加者に対して要望があった。

⑥意見交換会

・地域の人とこの施設との「つながり」について自由に意見交換を行ったところ、震災前は、施設に世話になりたくないという意識だったり、存在だけは知っているような状態だったり、家族が利用している施設という意識のみだったが、震災時ここに避難し、つらい時期を共に過ごしたことで、家族のような繋がりが生まれたと参加者から話があった。施設側からは、地域との関わりについて、行事の時だけで終わってしまうことも多かったが、震災後、一緒に生活したことですごく身近になったとの話があった。これまで「地域の人に何かしてあげよう」という考えがあったが、相互の協力や関わりが大事だということを実感したとのことだった。

・認知症やその理解についての参加者から自由に発言してもらったところ、家族からは、認知症を恥ずかしい、隠そうとしていた、認知症になる前とは異なる現在の姿を見せたくない思いもあったとの発言があった。また、「何で（施設に）入れたの？」と周りから言われて傷つくこともあり、正しい判断だったのか悩んでいたが、今は（認知症のことも）オープンにして（気持ちも）楽だし、周りも気遣ってくれていると思えるとの発言もあった。

・高齢者（特に認知症の）の接し方について、小さい時から教育していけばいいとの意見があった。同じように、津波や防災教育についても、小さい頃からの教育が必要で、これについては学校の先生ではなく、祖父母世代が伝えることが大事、伝わり方が違うのだという意見もあった。施設側からも、数回のボランティアではなく、地域で生活していく中で、困っている人がいたら助けるということを子どもたちが自然に学んでいければと話していた。

◇参加した感想◇

震災時に避難場所として地域住民と一緒に過ごしたとのことで、地域住民とのつながりの強さが感じられた。委員ひとりひとりが、地域やこのホームに対する強い思いを持っていらっしゃって、そのことを話し合える場であることが感じられた。震災が強い思いと絆を作り上げたことが察せられ、まさしく「密着」したであろうことがうかがえた。

・聞き取り調査のまとめ（総括）

6 事業所の 9 回の運営推進会議に実際に参加させていただいて感じたこととして、以下のようにまとめた。

・事業所の立地によって、サービス提供のあり方に影響を及ぼしているように感じられた。住宅街の中にある事業所においては、日常的に住民の行き来があるとともに、身近な地域の福祉サービスや相談の拠点として情報発信をしたり、住民からその役割を期待されており、地域のニーズを把握することに対する意識もより高いように感じられた。一方、同じ法人で運営している施設の敷地内に立地している事業所においては、住宅街からは若干離れてはいるが、日常的に法人施設の建物を利用したり、法人施設と協同で事業等を行うなどして、それぞれ立地を活かしたサービス提供が行われていた。

・運営推進会議の開催の仕方に多様性があった。これは運営推進会議が活性化するための工夫について聞いたアンケート結果にもあったが、運営推進会議の開催の仕方について、避難訓練や誕生会、ワークショップ、会食など、単なる会議だけでなく、運営推進会議そのものを行事と関連づけ、まずは事業所に来て事業所や利用者のこと、認知症のことを知ってもらうきっかけとなるような会議の設定の仕方を工夫している事業所もあった。

・また、事業所の運営法人の違いによっても、運営推進会議のあり方に影響を及ぼしているように感じられた。アンケート調査で最も多かった運営主体である「営利法人」においては、理事会や総会のような形で会議が進められ、議長は、所長やスタッフ以外の外部の参加者から選出されていた。

・運営推進会議の参加者は、多様であった。利用者、利用者家族といった、事業運営に直接影響のあるメンバーのほかに、行政担当者、民生委員、自治会長や元教員といった、地域に影響力がある住民の参加が多かった。

・運営推進会議の議題・話題として共通していたものは、利用者の入退所、要介護度等の報告を中心とした「状況報告」であり、防災・震災復興に関連する話題・議題も共通していた。緊急時にどのように対応するかは、事業所にとってだけでなく、地域住民にとっても関心が大きいことが伝わってきた。

・上記の他に報告されている内容として、「研修報告」や「行事・活動報告」、「事故、ヒヤリハット報告」であり、事業所の状況について、オープンに情報公開している姿勢が伝わってきた。また、訪問させていただいた会議のタイミングが、ちょうど、介護報酬等の改定の詳細が示される前後であり、事業所によっては、改定後の利用料の例を示して説明しているところもあっ

た。利用料の値上げに関わることは難しい話題ではあり、家族や利用者にも個別に説明していく内容ではあるが、運営推進会議のメンバーにも制度の背景と事業所の状況をしっかりと説明し、運営していく姿勢が感じられた。

・今回参加したどの運営推進会議でも、参加者からの意見交換や質疑応答が活発であり、会議の内容自体が充実していると共に、そのことが事業所運営の充実に繋がると感じられた。事業所自体の運営に関わる内容だけでなく、「地域」を話題にすることで、参加者の関心を喚起していくことが必要ではないかと感じられた。